

第6回

平安時代に詠まれた恋歌の世界

講師名 立教大学文学部教授

加藤 睦 (かとう むつみ)氏

受講日 平成29年9月30日

場 所 日高市生涯学習センター

参加者 合 計 69名

受 講 者 数 57名

当日のみ受講者 12名



講師プロフィール

1957年 東京都生まれ

1980年 東京大学文学部卒業

1988年 東京水産大学専任講師

1992年 立教大学に助教授として着任

その後、入学センター長、広報渉外部長、文学部長など

2011年 研究推進担当副総長、リサーチ・イニシアティブセンター長、
立教セカンドステージ大学副学長など兼務

主な著書

『文学の基礎レッスン』 春風社 2006年(共著)

『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』 世界思想社 2007年(共編著)

『源氏物語と江戸文化・可視化される雅俗』 森話社 2008年(共著)

『源氏物語と和歌』 青簡社 2008年(共著)

《はじめに》

平安時代の男女が交わした数多くの恋歌の中から、有名な歌や、当時の恋愛事情が知られる作品を取り上げて、読み解きます。人が恋するのは昔も今も同じですが、男女の交際のしかた、結婚に至る過程、結婚してからの生活など、異なることが多いので、それが恋歌にどのように反映しているのかを考えてみたいと思います。



《講座のあらすじ》

今日のテーマは、今までのライブラリーの講座のテーマに比べますと、柔らかいテーマですが、平安時代の「恋歌の世界」についてお話させていただきます。今の言葉で言う「恋」と、本日お話する平安時代に詠われた「恋歌」の「恋」の意味とは少しずれがあります。本日のお話は、平安時代の「恋」というのがどういうものであるのか、ご理解いただけたらと思います。

1.『竹取物語』に見る「恋」

「竹取物語」の主人公はかぐや姫。かぐや姫に恋をしている男性たちの気持ちをお話させていただきます。現代の人たちも恋をするのですが、現代の男性がする恋とはちょっと違います。「恋」という言葉を現代の辞書を引くと「異性に(男性は女性に、女性は男性に)愛情を寄せる心」と書いてあります。竹取物語の恋歌に入る前に、頭に入れておいていただきたいキーワードがあります

○かぐや姫に恋する男たち

世界の男、あてなるも、いやしきも、
「いかでこのかぐや姫を得てしかな、
見てしかな」と、音に聞きめてて感ふ。
そのあたりの垣にも家の門にも、
をる人だにたはやすく見るまじきものを、
夜は安きも寝ず、闇の夜にいでても、
穴をくじり、垣間見、迷いあり。

[訳文]世の中にすむ宮仕人は、身分の高い低いには区別なく、みな「なんとかしてこのかぐや姫を手に入れたい。妻にしてみたい」と噂に聞いて、感じ入って心を乱す。そのあたりの垣根の近くや、家の門の近くやに仕えている人も、そう簡単に見られようはずもないのに、夜は安眠もせず、見えるはずもない闇夜にさえ出かけてきて、垣根に穴をあ

けたりして中を覗き、うろうろしている。

[解説]訳文の中に「噂に聞いて感じ入って心を乱す」というところがありますが、かぐや姫は竹取の翁の家で外に出る事もなく、大事に育てられていました。平安時代の貴族の女性はそんな生活をしていたのです。一度も見た事のないかぐや姫に、噂だけで夢中になって恋をしていたのです。恋をした男の人たちが思っている「かぐや姫をわがものにしたい。妻にしたい」という一方的な思いが「かぐや姫を得てしかな、見てしかな」という箇所で見えます。「得てしかな」の「しかな」は「～したい」という意味で、単刀直入な表現です。「所有してみたい」という表現は、結婚してみたいという意味なのです。現代の甘い感じの恋とは違い、平安時代の恋には強い感じが出ています。

○最後の残った五人の求婚者

そのなかになほひけるは、色好みといはるるかぎり五人、思ひやむ時なく、夜昼来たりけり。その名ども、石作の皇子、くらもちの皇子、右大臣安倍御主人、大納言大伴御行、中納言石上磨足、この人々なり。
世の中に多かる人をだに、少しもかたちよき人と聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫をみまほしうて、ものも食わず思ひつつ、かの家に来て、たたずみ歩けど、かひあるべくもあらず。文を書きて、やれども、返りごともせず。わび歌など書きておこすけれども、甲斐なしと思えど、十一月(てもづき)、十二月(てわす)の降り凍り、六月(みなづき)の照りはたたくにも、障らずきあり。

[訳文]そんな中で、依然として結婚を申し立てていたのは、当代の色好みといわれる者すべての五人。諦めもせず、夜も昼も通ってきていたのです。それらの人の名は石作の皇子、くらもちの

皇子、右大臣安倍御主人、大納言大伴御行、中納言石上磨足、この人々なのであった。

この人たちは、世間にいくらでもいる程度の女でさえ、少しばかり容姿が良いと噂を聞くと、わがものにしたがる人達であったのだから、かぐや姫の評判を聞いて、ただもうわが物といたしたく、食うものも食わず思い続け、姫の家に行って、たたずんだり歩き回ったりする。だが、効き目はありそうにもない。恋文を書いて送るのだが、返事もなし。苦しい思いを詠んだ歌を書いて送ってくるが、効き目がないとは思うものの、十一月、十二月の雪が降り氷が張るのにも、六月の太陽が照り付け雷が鳴りとどろくのにも妨げられずにやってきている。

【解説】このような当時の男性のやることは、思い通わす女性の家の近くを歩き回る事、恋文を書いて送ること、苦しい思いを詠んだ歌を送ること、効き目がないとわかってあきらめず、熱心に苦しい思いを書いた歌を送り続けたのです。

○キーワード

竹取物語の中には「わび歌」はほとんどありませんが、次に「わび歌」とはどんなものかをお話させていただきます。キーワードとは「得る」「音に聞く」「見る」の三つの言葉です。

・「得(う)」①手に入れる。自分のものにする。②得とする。優れる。

・「音に聞く」①噂に聞く

・「見る」①見る。目にする。眺める。②見て思う。見て判断する。理解する。③男女が関係を結ぶ。結婚する。妻にする。④世話をする。面倒を見る。⑤出会う。経験する。

平安時代の「恋」は、現代使われている「恋」の意味とはずれがあります。キーワードにあるような言葉を使って恋心を表現し、恋歌にしていたのです。結婚よりも以前に感じる「恋」を歌にしたのが恋歌です。現代では、学生相手には特に、リアルな男女関係を表す言葉を使いにくい場合があり、その時には「とも寝」という言葉に置き換えて使うよ

うにしています。

2.「わび歌」の例・恋の苦しみをどのように詠むか

こういうのがわび歌だと思われるものを、古今集、古今和歌集から五首抜き出してみました。

音羽山
音に聞きつつ
逢坂の
関のこなたに
年をふるかな
(古今集 在原元方)

【訳文】音(うわさ)に聞くばかりで、大阪の関を越してお逢いするだけでも知らずに、関の手前で月日を送っているのですよ。

【解説】平安時代の恋の歌です。恋の歌を理解するには、意味をしっかりと掴まなくてははいけません。思いをそのまま表現するのではなく、美しく遠回しの表現を使っています。その為にこの句の作者は地名を二つ登場させています。「逢坂の関」の手前で年を越さなくてはいけないという、つらい思いを伝えていきます。「音羽山」から「音」を「逢坂の関」から「逢う」を使い遠回しに詠んだ例です。

駿河なる
田子の浦波
たたぬ日は
あれども君を
恋ひぬ日ぞなき
(古今集 よみ人知らず)

【訳文】駿河の国の田子の浦には波のたたぬ日はあるけれども、私があなただを思わない日はない。

【解説】大した歌ではないと思います。頑張ればこのくらいは作ることができる歌です。平凡な語彙を使った歌です。

夕されば
螢よりけに
燃ゆれども
光見ねばや
人のつれなき
(古今集 紀友則)

【訳文】夕方が来ると私の思いは螢の火よりもいっそう燃えさかるが、恋の炎は目に見えないせいかな、あの人はあのように冷淡なことよ

【解説】自分のつらい思いを「螢の火より燃えてるんだよ」という気持ちを相手の女性に訴えている歌です。「田子の浦」の歌よりも工夫し、一生懸命作った歌です。

死ぬる命
生きもやすると
こころみに
玉の緒ばかり
逢はむと言はなむ
(古今集 藤原興風)

【訳文】あなたへの恋の苦しみで死んでいく私の命が、生き返るかもしれないと思って、試しにちょっとした間だけ私に逢ってあげようと言って欲しいものだ。

【解説】弱々しく同情をかう感じの歌です。「玉の緒」は「短い事」「ちょっとした間」を意味した表現です。「緒」宝石のような・・の意味もあります。「誰かにすがってみたい」という思いを表現した歌です。

今ははや
恋死なましを
逢ひみんと
頼めし言ぞ
命なりける
(古今集 清原深養父)

【訳文】今はもう恋死にしておもう。あの人が「逢いましょう」とあてにさせた言葉が、私の命(の支え)だったのだ。

【解説】本音で言ったのではない「逢いみんと」の言葉を信じていたけれども、騙されたと男性が分かったときの歌です。わび歌の例として五首の歌を載せましたが、共通する歌に含まれる気持ちは「共寝」がしたい・・・という事なのです。

3. さまざまな恋の歌

①後朝の別れ(きぬぎぬのわかれ)

平安時代の男女の交際の仕方は、夕暮れのように女性の家を訪れ、朝まだ暗いうちに自分の家に戻っていくというやり方でした。共寝をした後の別れを「後朝の別れ」と言います。

しののめの
ほがらほがらと
明けゆけば
おのがきぬぎぬ
なるぞ悲しき
(古今集 よみ人知らず)

【訳文】東の空が白くなり、ほのぼのと明けていくと、重ねていた衣をそれぞれの身に着けて別れることになるのが悲しい。

なたを待っていました」の意味を含む歌です。

しののめの
別れを惜しみ
我ぞまづ
鳥より先に
泣きはじめつる

(古今集
鬱)

【訳文】明け方別れを惜しんで、私の方がまず(夜明けを告げる)鳥よりも先に泣き始めてしまった。

【解説】朝二人の男女が別れる時の様子を詠んだ二首です。どう感じるかは読んだ人の気持ち次第だと思います。現代の恋の歌の様に「恋しい」とか「恋」という表現は、平安時代には使わなかったのです。

②恋人・夫の訪れをまつ(女性の歌)

今来むと
言ひしばかに
長月の
有明の月を
待ち出でつるかな

(古今集
素性法師)

【訳文】今すぐ行くよとあなたが言ったばかりに、私は九月の長い夜を、有明の月が出るまで待ち続けてしまった。

【解説】古典の恋の歌は「悲しい気持ち」を読むもので「うれしい気持ち」を詠む歌はあまりありません。実際の人生で読んだ歌だけではなく、この歌のように作者が「お坊さん素性法師(男性)」であっても女性の気持ちを女性の立場に立って作る場合があります。この歌は「有明の月が出るまでずっとあ

宮城野の
もとあらの小萩
露を重み
風を待つこと
君こそまて

(古今集
よみ人知らず)

【訳文】宮城野の下葉がまばらな小萩が、葉上の露が重くて、風を待つように、私はあなたを待っています。

【解説】宮城野は今でいう仙台あたりの野原で、萩の花が美しく咲く場所を表しています。「私はあなたを待っています」の意味を詠んだ歌です。どんなふうにいるかという事を、例えば「萩の上の露が重く、風がふいてくるのを待っています」という表現で「あなたを待っています」の様子を形容している歌です。平安時代の歌は、直接的な言い回しをしないで遠回しに表現し、この歌はそういう点ではよい歌だと思います。

③愛を疑う。不安を感じる

いつはりの
なき世なりせば
いかばかり
人の言の葉
うれしからまし

(古今集
よみ人知らず)

【訳文】偽りのない世であったらならば、どれほどあの人の言葉がうれしく思われるだろうに。

【解説】男から永遠の愛を告げられた女性の歌です。偽りがある世の中で不安を感じている歌です。

比較的に素直な表現で歌った歌です。

秋風に
山の木の葉の
うつろへば
人の心も
いかがとぞ思う

(古今集 素性法師)

【訳文】秋風に、山の木の葉がいろあせ散っていくと、あの人の心もどうなるのだろうかと思う。

【解説】よく出てきますが、お坊さんである素性法師はちょっと弱い女性の立場で歌を詠むのが上手な人です。

我袖に
まだぎ時雨の
降るぬるは
君の心に
あきや来るらむ

(古今集 よみ人知らず)

【訳文】私の袖にまだ時節ではないのに、時雨が降りかかるのは、あなたの心に秋(私を飽きた気持ち)来たのだろうか。

【解説】(語意 *またぎ→その季節ではないのに *時雨→秋の終わりごろから冬の初めに降る通り雨のこと)

私の涙がこぼれるという、直線的な言い方ではなくて、時雨という言葉に秋と飽きに言葉をかけて読んでいる奥の深い歌です。

④ 忘れない。忘れられない(女性の歌が多い)

古になほ
たちかえる
心かな
恋しきことに
もの忘れせて

(古今集 紀貫之)

【訳文】幸せだった昔にやはり立ち戻っていく私の心だなあ。あの人を恋しく思う事ではもの忘れをしないので。

【解説】紀貫之も女性の立場で読んでいる歌。古にもどってしまうという表現で、今はもう別れてしまっているという事を意味しているのです。人間というのはもの忘れをするものなのに、恋しいという気持ちだけはもの忘れしないものなのだ・・・という気持ちを歌ったものです。男に都合の良い歌とさえいえると思います。

形見こそ
いまは仇なれ
これなくは
忘るるときも
あらましものを

(古今集 よみ人知らず)

【訳文】あの人が残していった思い出の品も、今となっては仇敵(かたき)のようなものだ。これがなければあの人を忘れる事もあるだろうに。

【解説】「形見」というのは、現代では人の亡くなったときに、その人を思い出させるものの事をいいますが、平安時代はそうではないのです。別れ別れ

になったとか、すこし会えなくなった時とかを表す時も「形見」という言葉を使います。使っていたものを思い出す・・という時も「形見」を使います。男性的な目線で書かれた歌だと思えます。

⑤絶望・別れ

平安時代の恋の歌の方が現代の歌よりも広がり大きい気がします。なんでもかんでも「恋」の歌になっているので・・また平安時代の恋の歌は「別れ」が主題になっているものも多いです。

月夜には
来ぬ人待ちたる
かき曇り
雨も降らなむ
わびつつも寝む

(古今集 よみ人知らず)

我が家度は
道もなきまで
荒れにけり
つれなき人を
待つとせしまに

(古今集 僧正遍照)

【訳文】私の家は草が茂って道もないほど荒れてしまった。薄情なあの人を待ったりしていた間に。

【解説】僧正遍照という有名なお坊さんが、女性の立場で読んだ歌です。悲しい感じの歌です。待たなければよいのに、薄情な男を待ち続けている間に年月がたち、私の家は荒れ果ててしまった・・という気持ちを詠っています。「宿」という言葉は自分の意を表すときに使う語彙です。

【訳文】月夜には、もう来ることもないあの人をいつまで待ってしまう。すっかり曇って雨も降ってほしい。そうすればつらくとも寝る事が出来るだろうから。

【解説】月夜だといいついて待ってしまう。だから月はいらないので曇って雨も降ってほしい・・・つらくとも寝ることができるだろうに、という絶望的な歌になっています。

これまで、歌の説明をしましたが、どの歌がよいかは各自で判断して頂きたいと思えます。平安時代の恋の範囲が広い恋歌についてお話させて頂きましたが、全体的に見て平安時代の歌は暗く、明るい歌は恋歌にはならなかったのです。幸せな人たちはこの種の歌を詠まなかったのだと思ってください。

平安時代の「恋歌の世界」をお話ししました。平安時代の「恋の世界」となるとまた違うと思えますが、作品に残っていないので分からないのです。

《Q&A》

Q1: 短歌には平安時代から「五七五七七」の音節数になっているのですが、この音節数になったのはどうしてなのか時々疑問に思えます。どうしてこういう音節数が定着したのか、なにか由来というのはあるのでしょうか。

A1: 短歌、和歌の「五七五七七」の形式は、古今集の時代以前、万葉集の時代からその形式があります。それが何故なのかというのは分からないのです。この形式になじんでしまうと、それが快い字数であり、今その数式が定着しているのです、最初がどうであったかは分からないのです。いろいろの形式があった中から、自然と主流をなしてきているのだと思えます。今出来上がっている短歌の事を思うと、最後の部分の「七七」は作者の気持ちを相手に伝え、「囁みしめる」感じになっています。そういう風

に、いろいろの歌人が「五七五七七」という字数で歌を詠んでくると、これ以外の字数では表現できない、良い字数であるという事だと思います。こういう形式が整ってしまっているということで、どうしてこの形式になったのかは分からないというのが本当なのです。

Q2: 「恋人・夫の訪れを待つ」の所にある「今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな」の部分の「待ちいでつるかな」と「待ちいずるかな」の違いを教えてくださいと思います。

A2: 「まちいづ」は「ずっと待っていると何かがでてくる」という時に使う表現、例えば月が出るときなどは、この言い方をします。「つる」という言葉は現代語で言えば「～してしまった」「～しちゃった」「実現した」「完了した」という意味を持つときに使います。「有明の月が出るのをこの時間まで待ってしまった」という意味を「待しいでつるかな」で表しています。「つ」「つる」に似た言葉「ぬ」などがありますが、ほとんど現代では使わなくなっています。「つる」があるのは「夜が終わるところまで来てしまった」という表現の為に使っている語彙です。

Q3: 「恋歌」の世界についてのお話ありがとうございました。恋歌の世界は身分の高い貴族の人たちが詠んだ歌の様に思いますが、その当時の庶民の人たちはどんな生活をしていたのでしょうか。

A3: 古今和歌集の中に「詠み人知らず」というのが、今日の資料の中にも半分くらいありますが、作者のわからない「詠み人知らず」の歌が何であるのか？実は研究上の問題です。身分が低い名もない人が詠んだというのは一つ、実際に身分の低い例えば商人のような人が詠んだとしても、字が書けたのであろうか、そういう人が詠んだ歌が後世に残るかどうかも問題です。

平安時代の庶民の人が歌を歌えたとしても、それが後世に残らないので資料として残っていないのです。それらしいものを残しているという資料がないわけではないけれども、本当に庶民の生活を反映しているかどうかは確かでないのです。文字資料に残っていないので、貴族の世界の事で庶民の生活程度は、はかり知ることができません。

(亀山)